

温泉町で蝶の化石を発掘

神谷喜芳

1. はじめに

温泉町の南に位置する海上地区は、1964年夏、浜坂高校生がムシヒキアブの1種 *Asilinae* の化石を発見（衣笠、1981）して以来、昆虫化石の宝庫として有名になった。当時は浜坂高校の地学班と鳥取大学で調査活動を行っていたが、それから数年後公に発表して以来、全国から地質学の研究者、学校の先生、一般のマニアの人たちが殺到して、出土した露頭は大きく破壊され、現在では崖崩れの恐れがでている。このため温泉町教育委員会と地主は漁網で露頭を被い、警告の看板を出し注意を促しているが、採集は後を絶たない状況である。

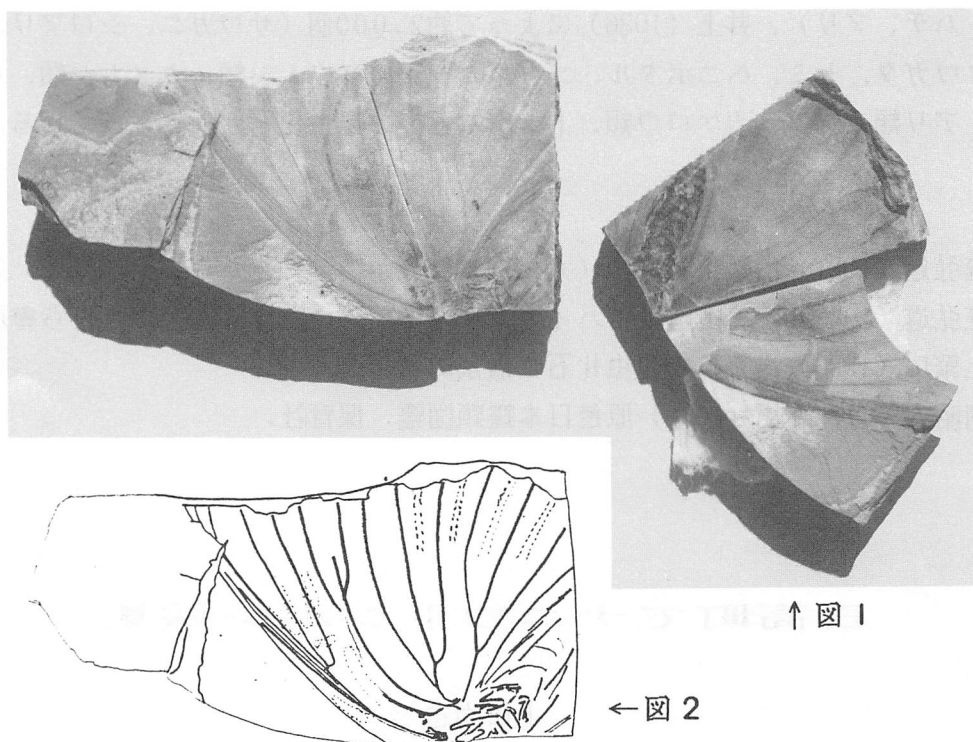
筆者の約2年間の調査活動は、問題の露頭以外の場所や、転石に限って行っているが、それでも40例以上の化石を得ている。そのなかで昨年夏、“但馬理科サークル”の巡検の際発見した蝶の化石について報告する。

2. 採集と同定

1988年7月31日、“但馬理科サークル”の面々と露頭の周りを調査した際に、問題の化石が低い土手状の露頭で、大きなブロックを取り出しているときに見つかった（図1）。取り出す際に雌型が足元の谷に落ちたが運よく見つかり、2つのブロックに分かれた雄型、雌型を手にすることができた。見つけてからさらに他の部分（頭部など）を捜してみたが、すでに過去に剝離していたもようで見つからなかった。

現地で上田尚志氏らと協議したが、タテハチョウの仲間であろうと思われるだけで、同定できなかった。その後、大阪市立自然史博物館の宮武頼夫氏に写真を送り、鑑定の依頼をしている。化石は全体に淡い黄土色をしており、胸部・腹部にかけて茶褐色を呈し、図1でもわかるように淡い紋様の部分がある。図2は化石から転記した翅脈図と紋様の図である。翅は裏側が見えており、前翅が後翅の裏に重なって、翅を開いた状態で化石になっている。

図2から現在種のオオイチモンジ *Limenitis populi jezoensis* と比較してみると、翅の大きさと翅脈に類似する点があり、また斑紋に似た紋様も見られる。



オオミスジ *Neptis alwina kaempferi* との比較では、現存種の前翅中室の白条の斑紋によく似た模様があるものの、翅脈および大きさに相違がみられる。

断定はできないが、これらのことからイチモンジチョウ類の近縁種と思われる。ただ十分に時間をかけて検討していないので、さらに検討を行っていきたい。諸兄各位のご指摘、ご教授をお願いしたい。

3. 終わりに

この昆虫化石が見つかる地層は、照来層群の春来泥岩層であり、おもに凝灰質シルト岩と凝灰質細粒砂岩の互層からなる。照来層群は村岡町の北部、相岡の相大池から美方町にかけてを南限とし、春来・檜尾にかけてを東限として、照来・奥八田地区から鳥取県境におよぶ東西約11km、南北約17kmの範囲にある。この照来層群は、新第三紀・中新世の頃、古照来湖に火山灰が運ばれて堆積してできたものといわれている。春来泥岩層からは、現在までに衣笠(1981)らによって約1,000個(カゲロウ、カワゲラ、シロアリ、カメムシ、ゾウムシ、カ、アブ、ハ

エ、ハチ、アリ），井上（1986）によって約2,000個（サワガニ、シロアリ、チビクワガタ、セミ、ベニボタル、コガネムシ類、ゾウムシ類、カメムシ類、ハチ類、アリ類、アブ、カゲロウ類、トンボなど）の昆虫化石が採集されている。

参考文献

衣笠弘道（1981）山陰化石物語（大久保雅弘ほか編）。たたら書房。

衣笠弘道（1983）続・山陰地学ハイキング（地団研山陰支部編）。たたら書房。

井上繁広（1986）温泉町の昆虫化石。温泉町教育委員会。

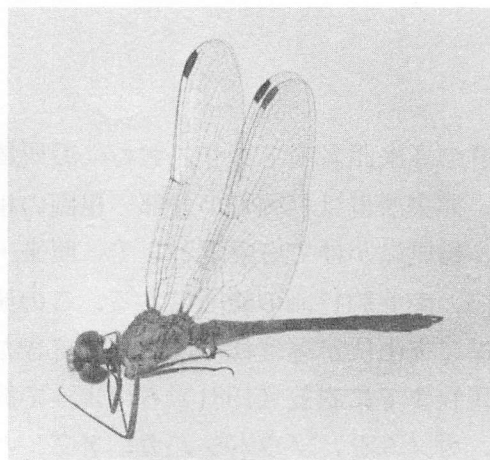
川副昭人・若林守男（1976）原色日本蝶類図鑑。保育社。

日高町でナニワトンボを採集

上田尚志

筆者は、日高町上ノ郷の農業用水池で、ナニワトンボ *Sympetrum gracile* を採集しているので、報告しておく。

ナニワトンボは、アカトンボ属 *Sympetrum* の1種であるが、雄は成熟すると青くなる美しい種である。分布域は、瀬戸内海沿岸部を中心に広がっており、日本海側での記録は少ない。但馬では、これまで未記録であったと思われる。



1 ♂, 1988-VIII-17,

兵庫県城崎郡日高町上ノ郷

1 ♂, 1988-VIII-22,

兵庫県城崎郡日高町上ノ郷